第 35 回“学びをひろげるわたしと〇（まる）人の会”まとめ
松井さんとの対話　Part２　2020 年 11 月 21 日開催

前回（第 34 回）の“学びの会”が、松森の拙著『街角の共育学～無関心でいない、あきらめない、他人まかせにしないために』（現代書館）の出版を機会に、松井さんが本を読んだ上でお題を設定して、話し合うという体裁の学習会を作りました。

普段教育について、学校について考えていることを率直に語り合うという試みは、予想した以上に面白く、いわば「教育的対話」が生まれたという満足を持つことができました。（そのまとめはホームページに掲載し、ユーチューブでも視聴していただけます）。

ホームページは　http://gakimon.main.jp/manabinokaimatome.html

ユーチューブは　https://youtu.be/Yk07pdHSpQ8

一方で、コロナ感染が拡大と収束を繰り返し、その後の“学びの会”のテーマづくりと開催の決断を下すことができないままに時が過ぎて行きました。

そこで浮かんだのが、「松井さんとの対話 Prt２」です。今回は松井さんに自由にお題を作ってもらい、ゆったりと、世間話のように、松井さんと松森の二人で学校について、教育について語り合うことにしました。お互いにとって 3 時間余り、しゃべり続ける機会は初めてのことで、これもまたなかなか面白い「教育的対話」が生まれたのではないかと思っています。ユーチューブにもあげていますので、視聴してみてください。

ユーチューブは　https://youtu.be/9RoSi42FTCI

第 35 回のまとめ

2020・12・14

松井直哉

私は若い頃から学校での評価（評定）については問題意識を持ち続けていた。だから今回の松森さんとの「世間話」に「評価」というお題はぜひ入れたかった。ただ、世間話としての会話だったので言い足りなかったところもあり、少々補足させてほしい。

教育現場での評価（評定）は子どもに対して教育的にはなっていない。子どものいい所は見ずに、主にテストの結果を数字化しているだけにすぎない。だからそれで高評価を得た子以外の子どもからはどんどん学習意欲を奪っている。子どもの学習意欲を掻き立てるにはその子のいい所を認めて周りに広めるというのが有効だ、と教員なら誰もが知っていながら、テストや通知表のたびにそれとはまったく逆の行為を行っているのが今の日本の学校の現状だ。子どもの学習意欲を犠牲にしてでも行う「評価」は何のためにしているのだろうか。

私がもう一つ問題だと感じることは、教育現場では評価が固定されてしまうということだ。人が他人を評価するということは日常生活の中でよくある。しかし、例えば
「ぼうっとしててダメなやつだと思っていたけど、ぼうっとしていたのはいろいろ考えていたからなんだな。ぼうっとしていたのは良かったのかもしれない。」
などと、その人に対する評価は随時修正されるのが一般的だ。しかし、学校では一度「１」を取ったら次に「５」を取っても「１」は永遠に修正されず、せいぜい「平均３」になるだけだ。「あなたのことを見直した」などという行為は学校の評価では縁がない。何という非人間的なことなのだろう。
まあ、まだ日本ではそんな非人間的な方法で高校教育、大学教育を受ける適格性を決めたりしているので、教育行為のすべてが非人間的になるのは容易に想像される。教育現場での人間らしさや人間臭さは制度からは期待できず、唯一個々の教育従事者の良心だけが頼りなのかもしれない（涙）。

評価を下す人間（教員）は逆に対象の人間（子ども）をどれだけ理解しているのかが問われる。相手に対して（偉そうに）評価を下すのだから、相手が見えて理解できていることが当然要求される。でも、人間が人間を理解するということはそう簡単にはできるとは思えない。だから、評価は固定されるべきではないし、所詮教員が下したレベルの評価など重要視されるべきではない。（私は自分が嫌いな人間から高評価を受けると逆に屈辱的な思いを感じていた。）

私は教育活動を「育てる」というイメージで考えることが多い。植物が水を欲しがれば水を、日光を欲しがれば日光を、（与え方はいろいろ工夫するが）与えてどう成長するのか楽しみに待つというイメージだ。その私のイメージには「剪定」はない。もちろん「間引き」もない。
栗林公園（高松市）の剪定された植木を見ても私はあまりうれしくはない。むしろ「人間好み」に変えさせられてゴメンね、と思ってしまう。一方、津田の松原（さぬき市）の松は補助の支柱などが施され、手入れや清掃などは充分感じるものの、基本、松は好きなように伸びている。私は栗林公園の木々よりも津田の松原の松の方が好きだ。
今の日本の教育は「剪定」ばかりか、「間引き」じゃないかという場面さえ見受けられる、と言ったら言い過ぎだろうか。テストや通知表が「剪定」や「間引き」になり、学校が社会好みの人間を製造する場になっているように思えて仕方がない。

てなことをもう少し力説したかったんです。

しょうもない評価はせずに、まずはその人（子ども）の人格を丸ごとそのまんま肯定す

る、というところから教育（育てるという行為）が始まることを切に願います。

松井さんの「語り」は、なぜかくも面白いのか

松森俊尚

「共に学ぶ」というイメージを、松井さんはこんな経験をひもときながら語ります。

――中学３年のときのリコーダーテストが忘れられへん。今までは個人の発表やったけど、ペアーで二重奏をする、しかも出席番号順でペアーを決めるねん。言うたら悪いけど、ワシは中学校で一番うまかってん。音楽のＮ先生もいつもはぁーとなって聞き惚れるくらい。そやけど相手のＭくんは、クラスで一番下手、そもそもリコーダーに触ったこともないくらいやねん。１週間後にテストをやるという。

最初は「Ｍくん、いっしょに頑張って練習しようや」と声を掛けて練習したけど、何ぼやっても無理やった。３年くらい練習時間をくれたらなんとかなるかもしれへんけど。

テストのとき、（リコーダーを）吹き出すとすぐ詰まるんやん。（楽譜を指さして）「次ここや」と言って、吹いたらすぐ止まる。「次はここやで、ミ、ソ、ラやで。セーノ。」で、また止まってしまう。ワシは音楽と英語だけはずっと通知票は「5」やねん。でもそのとき、もう今学期は「５」要らんわって思った。

テストの後Ｓ先生が言った言葉が忘れられへんねん。「決してうまい演奏とはいえませんでしたね。でもとても素敵な演奏でした」と、みんなの前で言うてくれてん。

そのときに、「あっ、音楽はそれやと思うてん」。自分の上手いのをひけらかすのが音楽やないねん。これとこれとが（手で目の前にいる人を何人も指し示す仕草をしながら）ハッピーになるのが音楽やねん。ということはやで、別に音楽だけと違うねん、国語でも数学でも英語でも、全部そうやねん。それを子どもに力説してんねん。

オマエ、自分の成績を上げようとかそんなセコイ勉強の仕方をすんなよ。隣にいる者、周りにいる者をハッピーにするためにやるんや。お前が力を付けたら、みんなハッピーになるんやと、毎年生徒には言うねん。

そんなこと言うてたら、他の先生に怒られてしまうねんけどな…――

松井さんはいつも経験を通して語る。子どものことも、保護者や教師のことも、学校の出来事も、政治や経済、社会の問題も、一人ひとりの経験というフィルターをくぐって表出した言葉であるかどうかを価値基準としているようにも見えてくる。だから話していると、私の奥底でひっそりと隠れていた、いや隠していた本音が、松井さんの言葉に共振して思わず声となって出てきそうになることもある。いやいつの間にかしっかり結び合って言葉を交わすことになっている。それは心の奥にあるちょっとしたキズを刺激したり、恥ずかしかったり、温かくなったり、なんといっても面白い経験をすることになる。この心の柔らかな反応を引き出す言葉こそが、教育現場で求められているのだと私は考えています。